

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 12 日現在

機関番号：32403

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884016

研究課題名(和文) 災害と交流からみる近世アジア民衆史の考古学研究

研究課題名(英文) A Archaeological Study on the Disaster and the Exchange of the Early Modern Asian Popular History

研究代表者

石井 龍太 (Ishii, ryota)

城西大学・経営学部・助教

研究者番号：00712655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世アジア民衆史の災害と交流に関する考古学的研究である。まず石垣島北部の安良村跡の発掘調査を実施した。この村は18世紀の歴史津波によって被災している。村跡から発掘された過去の人間活動は、18世紀の津波災害と19世紀の集落の復興の様子だと解釈された。

また琉球諸島、奄美諸島、濟州島にて家庭内で行われた豚飼育施設を調査した。アジア島嶼部における畜産技術の交流を明らかにすることは出来なかったが、堆肥生産や廃物処理が地域を超えて共通して行われること、1970年代には同時に消滅していくことが比較研究によって明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This project is an archaeological study of disaster effects and trade history in early modern-era Asia. Excavations were carried out in the Yasura village site, located in the Northern part of Ishigaki Island. This village was destroyed by tsunami in the 18th century. This study led us to believe the site contains evidence of human activities resulting from the tsunami disaster in the 18th century and village reconstruction efforts during the 19th century.

And we have researched pig breeding sites in Ryukyu, Amami and Jeju Island (South Korea) and could not find evidence of pig breeding technology transfer in the Asian Island area, but a comparative study led us to believe that the pig breeding systems utilized compost production and waste treatment techniques which originated outside the local area, both of which disappeared simultaneously during the 1970s.

研究分野：歴史考古学

キーワード：琉球諸島 民衆史 災害 交流 歴史考古学 集落 豚小屋

1. 研究開始当初の背景

近世・近代史研究において、文字史料に表れにくい民衆史の解明は低調であり続けて来た。文献史学、考古学双方から置き去りにされているのが現状である。

こうした問題意識から、研究代表者の石井は、琉球諸島南西部に当たる先島地域の集落跡を調査してきた。これまでに石垣島・安良村跡と、西表島・網取村跡にて調査研究を行ってきた。安良村跡は石垣島北部の平久保半島に位置しており、18世紀から1912年まで存続した集落であること、1772年に大津波によって甚大な被害を被ったこと、マリアの蔓延に苦しみつつ廃村となったこと等が明らかになっている。発掘調査の結果、廃村時に該当する近代期の屋敷跡がほぼ完璧な状態で検出され、さらにそれ以前の時期に遡る人間活動の痕跡が認められた。また西表島南西部に位置する網取村跡の発掘調査では屋敷地と家畜小屋の調査、分析に参加した。結果、網取村における近代期の日本列島との交流の具体的様相を掴む成果を挙げることが出来た。

2. 研究の目的

これまでの調査研究は、多くの成果と共に追及すべき課題も浮かび上がらせた。安良村跡の調査では18世紀代の掘立柱建物跡とその上層を覆う白砂層が検出され、18世紀末の津波によって壊滅した村跡である可能性が考えられたが、予算、時間の制約などから調査範囲は限られており、確証には至らなかった。また網取村跡の多くの屋敷跡は未だ手つかずの状況にある。調査研究の発展的継続のため、本研究はアジア民衆史の展開について「災害」と「交流」の二つのテーマを設定し、考古学的手法を軸として実証的に研究することを目的とした。

そして具体的な課題として、前者は津波を取り上げた。近年、「災害」に関わる津波研究は盛んだが、歴史的な視点で津波を挟んだ民衆史に取り組んだ例はかつてない。

また後者は豚飼育を取り上げた。交流に関する先行研究では専ら陶磁器の検討が行われてきたが、他の物質文化から分析と再検証を行う試みは活発とは言えず、なかでも遺構を対象とした調査例は少ない。琉球諸島ではごく近年まで便所と一体となった豚便所が家々に備えられていた。また中国、韓国、東南アジアに類例が求められ、アジア交流の中で伝播し独自化したものと推察される。本研究のテーマに相応しいといえよう。

3. 研究の方法

津波研究の具体的な対象として、安良村跡の調査を発展的に継続した。これまでの調査によって、津波痕跡と考えられる層位が複数確認されている。そこで安良村跡の該当する層位を複数地点で検出し、理化学分析を含めた多角的調査を実施し、津波の実態の把握に

努めた。

豚飼育研究では、先ず網取村跡から調査を実施し、さらに遺跡出土例や各地に現存する豚小屋の情報収集を行った。そして豚小屋の変遷と地域差を追究することで、琉球諸島の家畜飼育を遺構に即して追究した。さらに対外交流のあり方を探るため、奄美諸島、さらに済州島の民俗事例を調査した。

4. 研究成果

(1) 安良村跡の発掘調査

まず調査地点に所在する礎石建物跡の清掃を行い、その上で二次調査(2012年度3月)時に発掘したトレンチを再発掘し、未発掘のままだった3層以下(近代以前の層)の層位発掘を実施した。3層上面では焼土と灰が一部で検出された。また3層中では香炉(沖縄産無釉陶器)、土瓶(沖縄産施釉陶器)、鉄片、幼少のイノシシ類右下顎骨2点が並んで検出された(図1)。これらの遺物、遺構は、地表面上で確認される礎石屋敷跡より古い時期の人間活動の痕跡と考えられる。



図1

その下層に当たる4層上面では列をなすピットが2列検出された(図2)。軸方向が異なることから別遺構と考えられる。一部のピットは根固め石を伴い、掘立柱建物跡の一部と考えられる。



図2

また屋敷跡内の東側に新たにトレンチを設定し、層位発掘を実施した。南側では2層より下は摩耗した海浜砂が含まれる混土砂層と粘土を含む層とが互層となって確認された(図3 網掛部)。

なお南端では13層の上面で人頭大の礫からなる石積が確認された(図4)。近代期以前に位置づけられる1、2層の石積とは間層を挟むことから、より古い時期の遺構と考えられる。これは先に述べた掘立柱建物跡(図2)と層位が一致する。

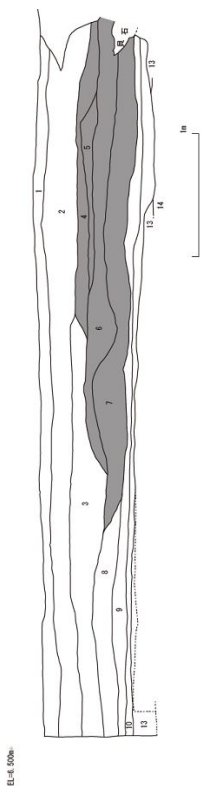


図3



図4

以上の成果、および第二次調査までの成果も総合して考察すると、調査地点では3度ないし4度に渡る人間活動が行われたことが確認される。

掘立柱建物跡、石積
焼土、動物骨廃棄遺構？
礎石建物跡、石積

出土遺構、遺物から、各時期の具体的な年代を絞り込むことは難しいが、2013年度に行った放射性炭素年代測定では、は概ね18世紀代の可能性が高い結果が得られている。また文献史料に記された村の移動の年代記録から、は19世紀後半から廃村となった1912年までの年代を当てることが出来るだろう。

さて安良村の文献史料において最も注目される事象として、1771年に発生した「明和の大津波」が挙げられる。上述の年代測定ではが津波の前後何れに該当するのか特定できなかった。また2014年度に新たに設けたトレンチから検出された全層のサンプルの珪藻分析を実施したが、何れの層からも

検出することは出来なかった。その原因については、分析を依頼したパリノサーヴェイから海底由来でも乾燥状態におかれた層では珪藻が分解するという見解が示されている。何れにせよ、理化学分析の結果からは津波堆積層の特定は難しいといえよう。

これまでの調査を踏まえ、津波層の候補として二つ挙げることが出来るだろう。

- (A) 砂層と粘土層の互層(図3 網掛部と)の間に津波が発生)
- (B) 発掘限界とした砂層(より前に津波が発生)

何れも、これまで八重山地域で認定されてきた津波堆積層とは様相が異なる。(A)は2011年に被災した東北地方、および千葉県九十九里浜といった地域の発掘調査において同様の堆積現象が確認されており注目される。一方(B)の砂層は摩耗の少ないサンゴ礫や残棘率の良いバキュロジプシナ(星砂)を多量に含むこと、また上下の層が腐食土層であることから、自然に考えれば森林内へ海底の新鮮な砂層が運ばれて形成されたと納得される層である。但し陸産の土壌が含まれず、余りにも海砂の純度が高い点は津波堆積層としては不自然であり、過去に認定された事例とはやはり異なる。また柱穴の覆土からは砂が検出されなかったことから、柱を立てた後に浜から採取した砂を屋敷地内に敷き詰めた人為層の可能性は払拭されない。

現状では、(A)が「明和の大津波」に由来すると考えるのが最も蓋然性が高いであろう。すると上述の村の変遷は、

- 被災した旧安良村跡
 - 被災後の一時的利用
 - 再度の海浜への接近
- と解釈できるだろう。

(2) 琉球諸島、奄美諸島、濟州島の豚飼育施設

本研究のもう一つの柱として、これまでに家庭内での豚飼育の歴史があったとされる琉球諸島、奄美諸島、濟州島の豚飼育施設の情報を集め、地域間の比較研究を実施した。遺跡から出土する骨格からはブタとイノシシとの明確な区別が難しいとされ、物質文化からの家畜飼育へのアプローチも必要と考えられる。本研究では、先ず屋敷内に設けられた小規模な豚飼育施設を地域ごとに確認し、持主の許可を得て写真撮影と作図を実施した。また民俗誌を収集するとともに、可能な限り地域住民の方々から聞き取り調査を実施した。

< 琉球諸島 >

調査を踏まえ、琉球諸島におけるブタ飼育の展開は以下の様に整理できるだろう。当初は便所と一体となり、ブタに人糞を補助食として与える豚便所であり、19世紀には登場する。床に敷いた草をブタに踏ませる堆肥生産も重要な機能のひとつであった。豚便所は戦後まで使われ続けたが、戦前から寄生虫等の

衛生問題が指摘され、ブタを飼育する小屋と便所は分離されていった。戦後は家庭内豚飼育も減少し、概ね 1970 年代には豚飼育施設は消滅したと考えられる。

さて豚飼育施設の考古学的調査の結果、若干の例外を除いて琉球諸島全体で形態に大きな地域差は無いこと、平面形が直線と直角からなる長方形の一群が各地に分布することが明らかとなった。そして壁の素材と構造、そして屋根の特徴を分類の基準に大きく 5 種に分類されることが確認された(図 5)。

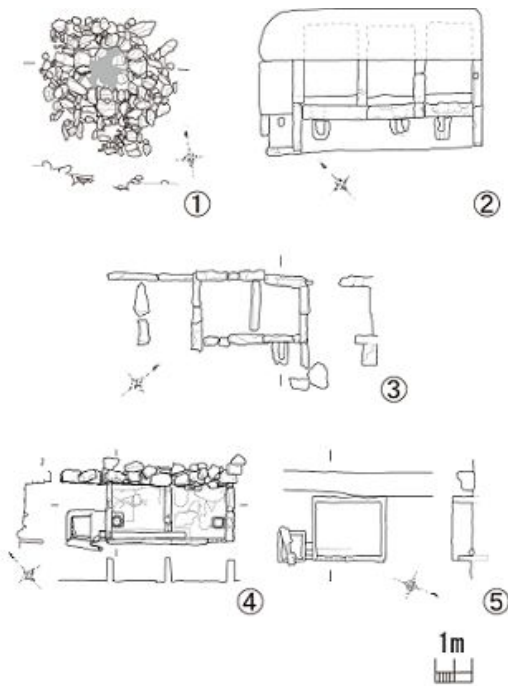


図 5

- 石製野面積・無蓋型(豚便所)
- 石製布積・石屋根型(豚便所、豚小屋)
- 石製布積・無蓋型(豚便所、豚小屋)
- セメント製・セメント屋根型(豚小屋)
- セメント製・無蓋型(豚小屋)

豚便所と豚小屋の区別は()内に示した。形状・構造の類型と、豚便所・豚小屋といった機能がある程度対応することがうかがえる。なお「無蓋型」は、調査時点で屋根が確認されないという意味の呼称である。

そして確認し得るこれら 5 種の類型は、併存しながら近世・近代・現代期に展開していったと考えられる。築造年代が判明する例は少ないが、は安良村跡で確認され、廃村となった 1912 年以前には存在したことがうかがえる。は明治 38 年の図面が残る。は 1966 年銘のある例が確認される。これら断片的な年代と形式学的解釈から、これら 5 種は一定期間併存しつつ、概ね石製野面積から石製布積、セメント製へと移行していき、また形態も変化してきたと考えられる。こうした変化の背景には複合した要因があると推察されるが、セメントという新素材の登場と

合わせ、ブタの変化を想定することが出来るだろう。セメント製の豚飼育施設はそれ以外と比べ壁が高いという特徴があり、在来種から洋種と交雑した大型種へと変化するにつれ、飼育施設にも変化が必要となった可能性は十分考えられよう。

< 奄美諸島 >

琉球諸島の北に位置する奄美諸島でも豚飼育施設が確認される。これまでに確認した中で最も詳細の分かる資料は、奄美市博物館に屋外展示されている豚飼育施設である(図 6)。これは瀬戸内町管鈍の眞島家の民家を移築したもので、便座や塵溜場、排水溝等は確認されず、小屋部と屋根のみから構成されている。床は砂地である。餌箱や水入れ等、小屋部内の諸施設は見られないため、どのような素材、形状のものがどう配置され使用されていたのか判然としない。



図 6

徳之島の南西部では、石灰岩の石積みによってコの字の壁を築き、左右の壁の内側にはセメントが分厚く塗布される事例が確認された。また遺構の確認と並行して実施した聞き取り調査では、琉球諸島で見られるような二槽タイプが奄美大島でも存在した可能性が浮上している。奄美市博物館の例は床が砂地であったが、敢えてそうすることで堆肥を作ったとしている点は興味深い。餌箱は木製品だったとのことで、遺構に伴わないのは腐食し遺存していないからなのかもしれない。

また琉球諸島と共通して、奄美諸島でもブタ飼育の動機は正月用、家庭内消費であったことが聞き取り調査から確認された。そしてブタ飼育は 1980 年代までに消滅したようだ。徳之島では専門家が登場したことが理由として挙げられており、自家消費型のブタ飼育の終焉を意味していると考えられよう。

< 済州島 >

もう一つの調査地である済州島には、トットンシーと呼ばれる豚便所が存在していたことが知られる(図 7)。屋敷の入口から最も遠い裏手に設けられ、屋敷囲いの石積みに接した例もよく見られる。地元産の火山性の石材を積み上げて小屋部の区画を設ける。奄美・琉球諸島の事例と比べ大型である。便座部は地面より高い所に設けられ、便を通す通

し孔(図7-2)は長方形を呈し、例外はあるものの豚を入れておく小屋部に対して横向きに設けられる点で奄美・琉球諸島の例と異なる。また小屋部の内部にはブタが休むための小屋が設けられる点も異なる。



1



2

図7

調査に協力いただいた姜京希氏(濟州歴史文化振興院)によると、こうした豚小屋は特に地方に存在していたが、1970年代にセマウル運動が行われると減少したとのことだった。ブタは葬式などの祭礼で肉を使うために飼育するが、販売もしたという。また豚小屋の中には糞が敷かれ、畑への肥料として利用するとのことだった。

以上、三地域の近世・近代期の豚飼育施設を概観して、ブタ飼育の位置づけと目的において共通点を指摘することが可能である。ブタは屋敷内の裏手に設けられた小規模な施設において数頭単位で飼育され、祭礼時などの特別な料理のために家庭内で消費された。また排泄物を処理してくれる便所でもあり、堆肥を作ることも重要な目的であった。農村にあって廃物処理とともに、農耕の一要素として位置づけられている点は注目される。しかしむしろ目につくのは相違点である。形態・構造には何れも共通点を見出しにくい。ブタの飼育技術の系統を三地域の物質文化の比較研究から論じるのは難しいと言えるだろう。特に濟州島の事例と奄美・琉球諸島の事例との間には大きな差がある。ブタを飼育しており、その効率的な運用のために各地で独自に工夫された結果が観察されているとみなすのが妥当と考えられる。但しこれは近代以降の事例が観察対象の主体となっているからであり、初期の豚飼育施設が遺跡から検

出できれば、また異なる結論を見いだせる可能性はあるだろう。

また三地域ともに、ブタ飼育が共通した目的でなされたことと共に、1970年代に消滅していったという共通点が確認された。琉球諸島では「本土復帰」とセットで理解されるが、既に復帰していた奄美諸島や、直接の関係のない濟州島でも同じ時期に消滅したという点は注目される。少なくとも近世以来身近にあった、目にも耳にも鼻にもつく家畜の気配が人々の日常から消えるという、民衆生活の体感の消滅がこの頃に広く生じていたことは注目される。政治史と異なり明確な年号で区切ることこそできないが、東アジア民衆史における大きな節目と理解することが出来るであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

石井龍太「琉球諸島、奄美諸島、濟州島における豚飼育施設」『南島考古』(査読なし) 34、採録決定済、2015年

石井龍太「7. 近世琉球王国と東アジア交流」『岩波講座日本歴史 第20巻 地域論(テーマ巻1)』(査読有) 岩波書店、pp165-190、2014年

石井龍太 盛田拳生「琉球諸島の豚飼育施設 -豚便所、豚小屋にみる琉球諸島の近世、近代、現代史」『南島研究』(査読無) 55、pp7-31、2014年

〔学会発表〕(計2件)

石井龍太「極東島嶼史」『2014 城西大学公開講座 世界の中の日本と地域を考える ~創立50周年に向けて~』2014年10月11日、城西大学・城西短期大学、城西大学坂戸キャンパス17号館201(埼玉県)

石井龍太「琉球近世考古学 モノが語る近世琉球史」『法政大学沖縄文化研究所 公開講座「沖縄を知る」』2014年7月25日、法政大学さつたホール(東京都)

6. 研究組織

(1)研究代表者

石井龍太(ISHII RYOTA)

研究者番号: 00712655